

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Introduction : Perspective of Postsocialist anthropology and its role

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高倉, 浩樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001244

序 ポスト社会主義人類学の射程と役割

高倉 浩樹

東北大学東北アジア研究センター准教授・国立民族学博物館共同研究員

ポスト社会主義人類学という現存する研究領域を明示し、この探究の人類学的可能性を考察するとともに、その過渡的な性質についても明らかにした上で、本書全体について紹介する。東欧・ロシア・コーカサス・中央アジア・モンゴル・シベリアといった旧ソ連圏における民族誌記述および人類学考察をすすめる上で共有可能な、一定の視座と方法論が、ポスト社会主義人類学をささえる土台である。その特徴は、伝統・社会主義・現在という歴史的位相を同時代分析の中で読み込む点にある。こうした研究方法は、ソ連崩壊によってフィールドワークが可能になったこと、さらに冷戦構造下で蓄積されたソ連地域研究の蓄積を批判的に受容することで生まれた。民族誌的にポスト社会主義を記述する、とは、「他者としての社会主義」を脱構築することであり、また制度としてのソビエト民族学を社会史的・思想史的文脈を読み解くことである。各地域における今後の研究の発展と時代の推移とともに、ポスト社会主義人類学の有効性は消失していくだろうが、その視座は、現代人類学と旧ソ連圏の民族誌を接合させる点できわめて重要である。また同時にグローバリゼーション分析など現代社会文化の変容に関する既存の諸研究や人類学史に関する通説的理解とは異なる視座を提示することが可能である。

- | | |
|--------------------|--------------------------------|
| 1 はじめに | 7.1 人類学史におけるソビエト民族学の位置 |
| 2 ポスト社会主義人類学成立の諸条件 | 7.2 エスニシティと伝統主義 |
| 3 現存する「伝統・社会主義・現在」 | 7.3 資本主義化過程の中での生き方と心
の問題 |
| 4 人類学と近現代史の邂逅 | 8 おわりに——ポスト社会主義人類学の
過渡性と可能性 |
| 5 「他者としての社会主義」の脱構築 | |
| 6 制度としてのソビエト民族学 | |
| 7 本書のねらいと構成 | |

*キーワード：ポスト社会主義人類学、地域研究、ソ連研究、他者としての社会主義

1 はじめに

ソ連崩壊とこれに前後する旧社会主義圏諸国の政治経済的変動から15年以上が経過した現在、今さら「ポスト社会主義」を冠した文化・社会人類学（以下、人類学）研究が存在するのか、読者は疑問に思われるかもしれない。もしくは経済人類学や生態人類学、さらに開発人類学やジェンダー人類学といったいわゆる人類学を構成する研究領域の一つとして、ポスト社会主義人類学を定置しうるのか、という疑問を抱くかもしれない。

しかし筆者がここでさしあたって提示したいと考えているのは、旧ソ連およびこれに隣接する諸地域（以下では、旧ソ連圏：ここでは東欧・ロシア・コーカサス・中央アジア・モンゴル・シベリアを挙げておく¹⁾）の民族誌記述および人類学考察をすすめる上で共有可能な、一定の視座と方法論が存在し、それに基づく研究領域が現存する、という確信的な仮説である。いうまでもなく、ここでいうポスト社会主義とは、上記諸地域の20世紀史において最も広範な地政学的影響力をもったソビエト連邦の崩壊を念頭に置いている。

本書は、上記の筆者の見解を何らかのかたちで共有する研究者によって営まれた共同研究の成果である。2004年10月から2007年3月まで2年半にわたって国立民族学博物館の共同研究「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用——制度としての人類学の多元性解明にむけて」（代表：高倉浩樹）が実施された²⁾。この共同研究は、1990年代以降に旧ソ連圏でのフィールドワークと人類学的考察をはじめた研究者が、互いの調査地の状況を提示し、共有可能な検討課題を練り上げる場として構想されたものであった。すでに1990年代後半から、筆者と本書の執筆者の1人である渡邊日日は、東京において旧ソ連圏に関わる人類学勉強会を開始していたが、この研究者ネットワークは、その後、もう1人の編者である佐々木史郎を巻き込んで、科研費プロジェクト「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」（2001-2002年度、基盤研究C・代表：佐々木史郎）に結実した³⁾。この科研費プロジェクトを通じて得られた問題意識をさらに検討するために、この共同研究は構想されたのである。メンバーは人類学者を中心に、民俗学や歴史学、考古学や法学といった隣接領域を含む21名であったが、ゲストなどを含むと発表者は30名にもなり、2年半の間に活発な議論が展開された。各会における発表をふまえて執筆されたのが、本書の諸論考である⁴⁾。

本書が立脚する「ポスト社会主義人類学」という研究領域の必要性は、旧ソ連・東欧・モンゴルなどで調査する多くの人類学者によって指摘されている。日本においては、シベリア研究者が牽引的にそのことを主張したが（佐々木 2003；渡邊 2002）、英語圏においては、東欧とシベリアの研究者がより早い段階でその必要性を主張している（Hann 1993, 1998, 2003；Hann et al. 2002；Leonard and Kaneff 2002；Mandel and Humphrey 2002など）。以下では、こうした先行研究を参考にしながら、筆者が構想するポスト社会主義人類学の射程とその役割について述べた上で、本書の構成について鳥瞰したい。

2 ポスト社会主義人類学成立の諸条件

人類史上はじめて社会主義を体制の基軸に掲げたソ連は、20世紀を通じて「西側」⁵⁾に対する最強の「他者」であった。1917年の出現からおおよそ70年の間、政治イデオ

ロギー・意志決定システム・経済的再分配制度・教育文化制度といった諸側面において、先進資本主義諸国やその植民地、影響下の諸地域で「西側」が普及を試みたものとは異なる、理念と社会制度の仕組みを、ソ連は作りだしてきた。それらの起源は近代西欧の思想に多くを依っていたが、マルクス主義の史的唯物論に基づく発展段階論上に自らの存立基盤を定置したソ連は、自国の諸制度を、近代西欧を超克するものと位置づけたのである。その一方で、トロツキーらによる世界革命が現実政治路線として放棄されて以降、西側先進資本主義体制の理念や社会制度は、ソ連同様の発展の道を辿るとは措定されず、「鉄のカーテン」越しに存在するものとみなされた。西側世界を他者化するまなざしを背景に、独自に構築された政治・経済・社会に関わるソ連の理念と制度は、20世紀末にいたる一定の時間的経過の中で、そこに暮らす住民の文化やアイデンティティに影響を及ぼしたのである。

とはいえ、ソ連という政治・経済・文化の中核のもたらす影響は、ソ連国内においても地域差があったし、またその隣接国においてはなおさらである。そもそも本書でいう旧ソ連圏を構成する東欧・ロシア・コーカサス・中央アジア・モンゴル・シベリアといった個々の地域は、歴史的にも文化的にも独自の伝統をもち、同時にそれぞれが旧ソ連圏以外の隣接地域との文明的連関の視座によって浮かび上がる特質をもっている。文学・歴史学・政治学などの様々な研究分野と共同で、人類学はそれぞれの地域研究が可能であり、実際にそのような取組みはかつて、現在も進行している。

にもかかわらず、私は少なくとも当面の間、ポスト社会主義人類学という視座と方法は必要であり、有効だと考えている。フィールドワークの成果は、もちろん通文化比較の素材に、そしてそれぞれの地域研究へ還元することを否定しない。だが、旧ソ連圏におけるフィールドワークおよび民族誌資料を用いた人類学的考察をおこなう上でのいわば土台として、共有できる方法論と研究領域が存在していると思う。本書を編集するに至った理由はそこにある。

ポスト社会主義人類学という枠組みは、そもそも旧ソ連圏に関わる人類学と地域研究の研究史の文脈の中で生じた、と私は考える。ソ連政府は、外国人社会学者による参与観察に基づくフィールドワークをほとんど認めてこなかった。そのため、1980年代末まで旧ソ連圏を研究対象地域とする日本および欧米の人類学者はきわめて少数だった。このことは日本語・西欧語による民族誌的報告そのものがほとんど刊行されてこなかったことを意味している。

その一方、旧ソ連に関する地域研究は、情報収集上の様々な困難を抱えながらも盛んであった。東西冷戦状態が逆にソ連の地域情報の収集と分析を活性化させていたともいえるだろう。その研究対象として焦点が当てられたのはソ連＝ロシアであった。西欧・米国のソ連研究は「全体主義」国家とその一枚岩的性質を強調し、日本での研究には、親ソ・反ソ・中立と様々な立場があったといわれる。いずれにしても冷戦体制下におい

て膨大な資料と分析の蓄積が残されてきたのである。そこではソ連といえばロシアのことであり、ロシアとはソ連のことだった。基本的な解読の射程は、ロシア人やロシア語とロシア文化で構築された社会でありながら、同時に、民族性をこえた普遍的存在と見なされた社会主義国家＝ソ連の全体性におかれていた。このような視角になったのは、何よりも社会主義国家を世界で最初に樹立した政治体制の起源と発展、そしてその未来を読み解く必要という問題意識が、政治学・経済学・歴史学の研究者に共有されていたからである。その結果、政治理念や法理論、経済体制や政治過程を中心とする歴史に関しては、細部に至るまで叙述され、緻密で分厚い知の蓄積が形成されたのである。

しかしこれらソ連地域研究の成果は、民族誌的報告という観点からすると精度が粗すぎ、比較研究の素材として人類学的分析の対象にすることはできなかった。特に人々の社会主義化された日常生活あるいはその多民族的コミュニティ、ロシア語と民族的少数者の母語との関係といった主題は、挿入画のような意味で描写されるに留まった。フィールドワーク・社会調査いずれの手段によっても、研究者自身がその地域に入って現地データを取れない以上、これらの主題に対する、人類学や社会学の観点からの本格的解読は、当然、なされなかった。国民性とパーソナリティの研究という1950年代に人気を誇った観点は、人類学者の眼をソ連＝ロシア全体に向けさせる可能性があったはずだ。だが、それも現地調査に基づくきめ細やかな資料も不足し、理論的新味を開拓できないと判断されたのか、本格的に取り組まれはしなかった。冷戦時代において、ソ連と敵対する諸国家の人類学者によって細々と営まれたのは、後述するが、ソビエト民族学の解読という文献研究である。要するに、冷戦時代、旧ソ連圏に関心をもつ人類学者と、人類学者以外によって蓄積されたソ連地域研究は結びつかなかったのである。

こうした状況が変わったのは1990年代初頭である。少なくとも日本において、人類学とソ連地域研究の邂逅は双方の需要から実現した。まず人類学側の事情について述べるなら、それは1990年代、旧ソ連およびその隣接地域の調査研究を開始した人類学者が、どのようなテーマで調査に赴こうと、ソ連社会主義化についての全般的知識なしに、参与観察を伴うフィールドワークができないという事実と直面したからであった。民族名称・住民の生活空間・社会組織、宗教的实践や政治的な意志決定といった社会のあらゆる領域に、社会主義は見事なまでに浸透していた。ある意味では皮肉なことであるが、社会主義体制が崩壊した地域の研究をするために、その調査直前まで「現存した社会主義」（塩川 1999）体制を把握する必要が生まれたのである⁶⁾。他方、日本におけるソ連地域研究は、例えば東南アジアやアフリカ、オセアニアなどの他の地域研究と比べて、歴史学・政治学の比重が非常に高いという特徴をもってきた。それゆえに、生活文化やエスニシティ・宗教といった社会文化の諸側面について十分な研究蓄積がされてきたとは言い難い。人類学的分析は、この点において、そして他の地域研究との比較検討の幅を広げるといふ点においても、ソ連地域の理解をより深めるものとなったのである。

3 現存する「伝統・社会主義・現在」

社会主義が崩壊した国家において、社会主義の影響を受けた社会文化現象を分析するというアプローチは、人類学調査としてそれほど珍しいものではない。19世紀後半から様々な意味でフィールドワークが人類学者の研究手法となって以来、常に崩壊しつつある「伝統」とたゆみなく浸透する「近代性」という二元論は、人類学者が常套的に用いてきた調査地の時間的関係の把握方法だったからである。

重要なのは、「国家と民族」、「生業経済と市場・資本主義」といった従来の人類学的知識で蓄積されてきた、近代性に関わる、伝統と近代の二元論的視座が、ポスト社会主義圏の分析ではあまり役に立たなかったことである。これは私の個人的感想ではなく、本書に関わった多くの人類学者が共鳴している点である。旧ソ連圏というフィールドの眼前に広がる諸現象は、既存の人類学的概念では適切に表現することが不可能だった。「伝統」よりも「近代」が凌駕している生活世界というのが、調査地の村落に入った際、私が抱いた第1印象だった。その「近代」は私にとって身近で親しみを感じるものではなく、何と表現可能かといえば、「西側的ではない」としか言いようがないものだった⁷⁾。西側・東側世界の絶対的差異という冷戦時代に構築された本質主義的言説を、オウム返しのように繰り返すしか術はなかったのである。

フィールドの地域事情を紹介する人類学の先行研究が存在しないというのが、ポスト社会主義人類学の始まりであったといえるだろう。地域事情の指南書としては、ソ連の全体像や社会主義制度全般を解説した歴史学や政治学、経済史の先行研究しかなく、各自は、それらを共通の参考書としながら、独自にフィールドワークに取り組むしかなかった。ポスト社会主義人類学という枠組みは、この現地調査者の眼前に広がる共通の課題——「社会主義の『現存した』社会構造を分析する方向性を示唆するのみならず、社会主義崩壊期をどう把握するか」(渡邊 2002: 41)——から、作りだされてきたのである。

近年、歴史学や政治学の分野では、ポスト社会主義という枠組みに対する批判がではじめている。東欧地域研究の家田はこの概念が「後ろ向きの名称」であり、また旧ソ連圏の研究がかならずしも政治経済的な移行に限定されないことを指摘しつつ、この地域における「歴史空間としてのスラブ諸民族が比較的優勢であった、あるいは現在優勢である」という認識に基づく「スラブ・ユーラシア学」を提唱している(家田 2008: 15)。また、バルカン近現代史の佐原(2004)は、ポスト社会主義概念は「様々な事象や現象を大雑把かつ一つ括りに論じることのできる場を提供した」と評価しつつも、「性格や位相の異なる諸現象を理解したつもりになるのに貢献したといえるかもしれない」と述べて、ポスト社会主義は独自の研究パラダイム構築に成功しなかったと総括している。特に佐原のいうパラダイム構築に関する指摘には筆者も同意できるが、他方で研究

枠組みの賞味期限がすでに切れたという点には賛同できない（本書の尾崎論文も参照）。ポスト社会主義という研究プログラムは、本書に示すように、地域研究と親和的な人類学研究分野においては、特にポストコロニアル研究やグローバリゼーション研究と接合性を持ち、両研究を従来とは異なる角度から鍛える材料を備えている。また人類学史の探求という点では、後述するが、これまでにない研究領域を開拓したのである。

歴史学や政治学、経済学が掲げる「ポスト社会主義」あるいは「体制移行研究」という枠組みと、ポスト社会主義人類学の間にはずれがある。ポスト社会主義という枠組みを破棄しようとする前者は、「ポスト社会主義」を明瞭に弁別できるある種の時代区分と見なしているのであろう。それ故にもはや「ポスト」ではないと認識し、さらに「ポスト」という収まりの悪さを感じ、破棄を提唱しているのだと思われる。これに対し、人類学者は、「伝統・社会主義・現在」という3つの歴史的位相を、同時代を理解する分析枠組みとして想定している。時代ごとに地域を明らかにするのではなく、社会文化現象の中にこの3つの位相を同時に読み込みながら分析するというアプローチを採るのである。

人類学者が認識しうる「現存」の生活空間は、歴史家が想定するような明瞭な時期区分によって弁別される世界ではない。フィールドにおいて人々の日常に、「伝統」と「近代」のせめぎ合いを読み取るのが人類学者の作法だとすれば、旧ソ連圏においては、「伝統」と「社会主義」さらに「その後の現在」が、同時代の光景として眼前に迫ってくる。塩川（1999）は歴史家の立場から自らのソ連研究の立場を、理念や思想としての社会主義に接近するものではなく、「現存した社会主義」であるというかたちで示した。この意味での「現存した社会主義」は、旧ソ連圏に生きる人々の日常世界に、依然として不可分な部分を構成している。ただ、それは歴史家が再構成する時間軸に応じた諸事実の秩序立った叙述という意味ではない。むしろ個人や集団の記憶・関心・意図に応じて強調されたり再編されたりしながら、常に「現存」しているものなのだ。人間の日常生活に関する微視的民族誌観察の上で、伝統・社会主義・現在という3つの歴史的位相を同時代性という観点から把握しようとするポスト社会主義人類学の枠組みの有効性は、家田や佐原の批判点とは異なる次元にある。

実際、伝統・社会主義・現在という視角によって照射・検討された諸問題は、従来の人類学には存在しなかった新たな研究領域を生みだし、またそれぞれ個別の地域研究に対しても様々なかたちで貢献している。例えば、近代化・植民地主義・ポストコロニアル・NGO・開発・グローバル化といった常に「伝統」の変容を促す諸要因に対して、これまで人類学が練り上げてきた諸概念は、旧ソ連圏ではそのままでは分析概念たりえない——いいかえれば、第1世界と第3世界の歴史的経験に由来する近代性概念は第2世界には通用しない——この視座は、ポスト社会主義人類学こそが提起した最大の貢献の1つである。1990年代における欧米・日本における旧ソ連圏を対象とした人類

学研究動向を批評展望した渡邊（2002：53）は、同様な視点から、ポスト社会主義圏の人類学とは、西欧的とされてきた近代に関わる諸制度・諸概念の新たな意味での概念再考のことだと主張したが、スターリン全集の表現をもじっていえばそのことは「全く正しい」のである。

4 人類学と近現代史の邂逅

ポスト社会主義人類学の最も大きな成果は、冷戦時代には存在しなかったソ連地域研究と共有しうる研究枠組みを生み出したことである。民族誌記述の対象となる人々の日常世界の中に「社会主義」という歴史的経験が現存している以上、その歴史的過程を知ること、最も重要な基礎知識だからである⁸⁾。

とはいえ、旧ソ連圏における人類学は、当然ながら社会組織・生業経済・宗教実践・開発やジェンダー・政治文化といった領域において、旧ソ連圏以外の民族誌報告と比較され、考察の対象になるという点で、決して旧ソ連圏という地域研究の文脈だけに拘束されない。さらにフィールドワークが各地において時代の推移とともに展開され蓄積されていく中で、また社会主義を経験として知らない現地の若い世代が社会の多数を占めていく中で、ポスト社会主義人類学の視座と方法の新味や有効性は当然薄れていくだろう。実際に、フィールドワークが各地で進められる中で、それぞれの地域に固有の問題が開拓されており、あるいは例えばイスラーム現象のように、旧ソ連圏という枠組みとは異なる地域的枠組みを必要とする研究領域も取り組まれている。その意味で「ポスト社会主義人類学」を過渡的と形容することは誤っているわけではない。

しかしながら、その過渡的な視座と方法が編みだされなければ、旧ソ連圏での民族誌的記述は、現代人類学とうまく接合できなかったに違いないと、私は考えている。現代人類学をどう定義するかは論者によって千差万別だと思うが、少なくともオリエンタリズム批判と構築主義以降の人類学において、民族誌的記述における近現代史をふまえた社会文化的背景は、これを無視するにせよ絶対視するにせよ、突き止めなければならない脈絡だからである⁹⁾。ここにこそ、ポスト社会主義人類学研究が共有すべき視座が存在する。

フィールドワークに基づく人類学研究で提示されたのは、ロシア人という非対称的なまでに大きな存在があるとはいえ、何よりもその生活空間が多民族性に満ちているということであった。この発見は、一義的には、民族的少数者を文化相対主義の伝統にならってそれ自体固有の研究対象として定位すべきだとする公準をもつ人類学的視座の当然の帰結であるといえる。人口の多寡に関わらず、例えばロシア人とタイミール半島のエネツ人は、民族誌的記述という観点で等価な研究対象たりえるのである。しかし、ポスト社会主義人類学が、ロシア人あるいは少数民族のどちらを優先すべきなのかという問い

に意味がない理由は、これに留まらない。

なぜなら、まずある意味では皮肉なことであるが、旧ソ連圏内の非ロシア人すなわち民族的少数者への民族誌的解明を深めるほど、地域的な偏差の中にも、彼らの生活空間に不可分な一部として存在するロシア人、ロシア文化、ロシア史が見えてくるからである。民族的少数者としてのエスニシティと自己認識は、それ自体単独で存在しうるものではない。旧ソ連圏では、民族的・言語的・社会的な意味でロシア人が主流を構成してきており、そのロシア人との相対的な関係に対する再帰的認識を1つの基軸として、非ロシア人は、エスニシティと自己認識を生成しているのである。逆に旧ソ連圏のロシア人を対象とする民族誌的分析もまた、民族的少数者の存在を前提としたこの主流意識ぬきに進めても意味がない。つまり、文化相対主義的視点からすれば極めてロシア的な文化伝統や歴史要素が刻印された社会空間が、ロシア人にとっても民族的少数者にとっても、民族誌的に透明な「近代」=ソ連的なものとして内在化されていることに着眼することこそが肝要であるが故に、ポスト社会主義人類学の対象は、あらゆる民族でありえるのである。逆にいうなら、彼らの日常生活が社会主義制度の「残存」によって構成され、人々がそういう生活をイーミックな概念として対象化し、その維持あるいは変革のために操作するという複雑な現実には、ポスト社会主義人類学でなければ把握しえないのである。

5 「他者としての社会主義」の脱構築

多民族性とその旧ソ連的文脈、さらに人々の様々な実践に着目する人類学的視座とその研究成果は、ソ連現代史研究を、歴史家自身の問題意識とも相まって、これまでの社会主義国家の起源と発展という問題関心から解き放ち、いわゆる近年の帝国論へと据える道筋を照らしたとさえいえる、と筆者は考えている。

この点を指摘する上で重要なのは、まずポスト社会主義人類学と旧ソ連圏地域研究が共有した研究枠組みには、人類学的意味での「文化的他者」概念と文化相対主義概念が含まれていたことである。政治史研究の立場からロシア研究を牽引する塩川は、ソ連崩壊以降のソ連（史）研究に必要な視点の1つとして、「異文化」概念と文化相対主義をふまえた人類学的視点による「内在的」アプローチを提唱した（塩川 1999: 37-49）。

いわば文化的他者としての「ソ連」という視座であるが、この問題はなかなか複雑である。塩川がこのような述べた背景には、日本における旧ソ連圏の地域研究では、「異文化」としての接近法が少なく、また「社会主義」という体制を人類学的な「文化」概念から捉えることが難しかったという「特殊」事情が考慮されているからである（塩川 1999: 38）。こうした状況は、西欧・米国のソ連研究とは対照的であった。英国社会人類学者のハーンは、ポスト社会主義という文脈と人類学の関係を、次のようにまとめている。彼によれば、植民地人類学が「未開の他者像」を構築してきたことと対応す

るように、冷戦時代の西欧・米国の社会科学は「東側の社会主義の他者像」を構築してきた。それ故に、従来の西側社会科学によって構築されてきた「他者としての社会主義」=全体主義モデルのソ連像を、民族誌記述によって解体することが（西欧）ポスト社会主義人類学の課題であるという（Hann et al. 2002: 9）。人類学の分析手法の重要な視座である「文化的他者」という概念は、日本のポスト社会主義人類学においては反転したかたちで存在しているのである。この点については渡邊がさらに適切な表現を紡いでいる。

「他者としての社会主義」という論点そのものが、文脈によっては思惟の冷戦構造（過度に社会主義社会の「異質性」を前提視し、西側と東側との間に認識論的カーテンを引く発想）と重なるリスクを避けられない・・・「社会主義の人類学」は・・・一方でそうした問題提起（すなわち、他者としての社会主義：高倉注）を行って議論の枠組みを作りながら、それを自ら切り崩さなくてはいけないという矛盾した戦略を採らざるを得ない（渡邊 2002: 41-42）。

この矛盾したアプローチを採る必要性に対する感受性や、「他者としての社会主義」の脱構築というポスト社会主義人類学のアプローチこそが、第1には「制度化された多民族性（institutionalized multinationality）」（Brubaker 1996: 23）という革新的な概念の発見に繋がった。これは社会学者のブルーベーカーによって指摘されたものであるが、彼はソ連がその体制において、政策的に民族を制度化し、そこに領土や自治と関連するレベル=民族自治と、文化的でより個人の属性に関連するレベル=民族籍の2つが同時に存在していたことを明瞭に言明化した。つまり制度化されたエスニシティと社会現象としてのエスニシティ、双方の関係に着目するアプローチの必要性を、彼は旧ソ連圏の民族問題の分析から発見し、根拠づけたのである。

「制度化された多民族性」概念はまず、近年のソ連地域研究における帝国論の隆盛を拓く端緒となった、と筆者は考える。冷戦時代、ソ連を帝国と見なすのはそれ自体、反ソの立場を示しており、他者としての社会主義（つまり西側と異なり、国家による強固な支配によって完全に馴致された諸民族から構成される一枚岩的なソビエト人=ロシア人の社会）を強調するものであった。一方、近年の帝国論におけるソ連は、西欧諸国・米国的な社会とは全く異なるという他者の視座を維持したまま、その本質化された他者像だけが脱構築されるという対象となった。かつてこの他者性とは、ポリシェビキの一元的な政治的暴力性に本質主義的に還元されていたものである。今や、これに代わり、住民の積極的協力や少数民族への形式的保護という要素が挿入されたのである。革命や社会主義建設への参加・民族自治を含む民族政策による民族問題の解決といった諸事実は、かつて親ソ的な立場からすれば、国家としてのソ連の正当性を示すためのものだった。それが今は、ソ連の帝国性を示す文脈へと移し替えられたのである。反ソ的な立場からすればソ連の虚構性を示していたスローガンやイデオロギーを、事実ではないとし

て否定するのではなく、そのスローガンやイデオロギーが提示された当時の文脈を探求し、関係する諸事実を再編していく。これが近年のアプローチとなったのである。

米国のソ連史家マーティンは、ソ連を、世界で最初の「アフーマティブ・アクション帝国」と呼んでいる。彼によれば、ソ連は連邦国家でも国民国家でもないが、しかしながらかつて歴史的に存在したいずれの帝国とも異なっている。それはソ連の民族政策において、民族自決の原則をロシア人ではなく、それ以外の民族的少数者に対してだけ独自に適用したためである。非ロシア人のネイションの形式は、領土・文化・言語・エリート育成と定められ、この4つを体系的に支援することにより民族主義的要求を満たし、一方で経済的・政治的な意味での一元的国家のために、社会主義的要求を融合させようとしたのである (Martin 2001a: 15)。ソ連が「帝国」だったのは、ポリシェビキ＝ロシア人が、民族的少数者に対して、支配ではなく積極的は正政策を採用することにより、社会主義連邦国家を実現したからである。「過度に侵略的、中央集権的で、暴力国家でありながら、形式的には主権国家の連邦として構造化された」ソ連 (Martin 2001b: 79) を、内在的に説明しようとした回答の1つがこの概念であった。

同様に、米国の歴史家ハーシュは、『諸ネイションの国家』と題するソ連史において、諸民族の牢獄としてではなく、様々な諸民族の相互作用的な参加過程の中にソ連の形成過程と構造を描き出すという手法を採用している。彼女は、特に支配の文化的技術の1つと位置づけられる民族誌知識に着目し、それとソ連初期の民族政策過程との関係に焦点をあてることにより、ソ連内の様々な諸民族的集団が「二重に同化」されたことを明らかにした。第1には、ソ連の制定したエスニシティ、ネイションといった民族の範疇に組み込まれたという意味での同化である。第2は、それら制度的に範疇化された諸民族がソビエト国家と社会に同化されたことである (Hirsh 2005: 2-14)。「制度化された多民族性」概念が切り開いた、制度や形式がもつ文脈に着眼する視座は、ソ連帝国論を深化させ、さらにソ連崩壊前後のエスニシティと民族紛争の歴史的発生経緯を、より精確に理解させることにも成功しているといえるだろう。なぜなら、帝国としてのソ連の中で熟成されたエスニシティが、20世紀末において、いかなる経路で政治的主張や紛争へと接続されているのか、その文脈を明確に示せるからである。

「制度化された多民族性」というポスト社会主義人類学が発見した概念は、以上に述べたソ連地域研究のみならず、人類学理論上にも大きな意味をもった、と筆者は考える。人類学におけるエスニシティやナショナリズム研究において暗黙の前提とされてきた「近代国民国家」を相対化したからである。従来の場合、アンダーソンが提示した「想像の共同体」論や、これを基盤にしたエスノ・ナショナリズム論においては、常に「国民国家」が、「民族と国家」研究の主題であった。これらの議論においては、出版やマスメディアといった近代技術を射程に取り入れてはいても、エスニシティが生成する過程は、本源論・道具論いずれにあっても、住民の「自然」な実践と見なされていた。これに対し

て、ポスト社会主義人類学が提示したのは、非国民国家とエスニシティという枠組みの存在であり、かつその観察から得られた、非国民国家＝帝国が制度化したエスニシティ、つまり住民にとっての「非自然」が住民に内在化されていく、というエスニシティ生成をめぐる、より高次の過程への注視を促す理論的視座である。制度と形式のエスニシティが、自治といった政治領域のみならず住民のアイデンティティや民族文化像の形成といった位相にまで、深く入り込んでいる様子を指摘したからである。この発見は、中国における民族政策とエスニシティ生成との比較研究の道も切り開くだろう。

このように「ソ連現代史に由来する理念・制度を含みながら現存する社会空間」の人類学的解明から、諸概念の見直しと新研究領域の開拓を促すのが「ポスト社会主義民族誌」である。本節では帝国論とエスニシティ論のみを具体例として紹介したが、それ以外でも、例えばエスニシティに関わる諸問題は、社会言語学的問題とも接続されてくるし、また宗教実践と儀礼に関わる領域、さらに農村部における民営化＝脱集団化や私的所有の出現に関わる問題や、農村・都市部も含めた市場経済システムの全般的な影響を住民の行動適応や倫理という観点から観察すること、こうした事柄もポスト社会主義民族誌の射程に含まれている（渡邊 2002; Hann et al. 2002）。しかし、どんなに研究領域が多角化しても、ポスト社会主義民族誌は、集団農場・国営農場といった旧ソ連圏において等しく言語化された生産に関わる諸制度を、文化的他者の視点から研究対象と位置づけ、これを民族誌的に解明＝解剖していくという根底の姿勢において、不動の視座を共有しているのである。

6 制度としてのソビエト民族学

ポスト社会主義人類学にとってもう1つの重要な課題は、ソビエト民族学という研究史の蓄積とどう対峙するかという課題である。これは、調査対象地域における「現地の」人類学の研究成果を自らの研究といかに接合させるか、という単純な技術的問題によるのではない。旧ソ連圏というフィールドには、先述のようにソ連の諸制度が内包されており、しかもその制度には、ソビエト民族学によって結晶化された諸概念が含まれている、という特殊事情が厳然と横たわっていればこそである。

ソ連における人類学＝ソビエト民族学は、ソ連の理念と制度と同様、その起源は西欧近代に遡るが、独自の方法と理論を打ち立て、その上で独自の課題を見だし探求した。ソビエト民族学にとっても、西側人類学は文化的他者であった。私自身の経験からすれば、フィールドワークで人々と言葉を交わすことは、自分自身が実践する人類学が西側的存在であることを強烈に自覚させられる過程でもあった。日本人類学史を振り返る時、そこに独自の課題や方法が存在することを否定するつもりはないが、研究方法や領域の基軸については、西側人類学のそれらを共有し、あるいは同一視しながら発展してきた

と指摘することはあながち間違っていない。しかしながらソビエト民族学は、パラダイムの段階ですでに西欧人類学と大きく異なっていたのである。

このような事態に遭遇した場合、ごく簡単な対処方法は確かに存在する。例えば、日本国内のある文化現象を分析する際、先行研究において人類学を用いるか、それとも日本民俗学を用いるかと考えれば、答えは自ずと明らかであろう。似て非なるものとしてソビエト民族学を位置づけさえすれば、その研究史の一切を無視して考察することが可能である。また、より「植民地主義的」高見に立てば、文化進化論と伝播論でとどまったとも評価されるソビエト民族学を、「現地の」いわゆるネイティブ人類学と見なして必要な民族誌データだけを抜き書きし、あとは不要とってしまう手続きも可能である。実際、開発やジェンダーといったソビエト民族学の研究蓄積がほとんど見られない研究テーマの場合、フィールドデータを自ら収集できた後は、せいぜい関連するソビエト民族学の民族誌記述を参照するだけ、という研究はいくらでも登場している。

しかし筆者は、論文における民族誌データの分析＝人類学的考察といったレベル以前の民族誌記述の段階で、ポスト社会主義人類学はソビエト民族学を無視すべきでないと考え。なぜならソ連現代史に直結する社会制度、例えば現地に必ずといっていいほど存在している「(旧) 国営農場事務所」や「文化の家」¹⁰⁾ は住民生活に深く入り込んでおり、農村部の現地調査において、これらの制度を抜きに彼らの生活の全体像を描くことは、全く正しくないからである。例えばサハリン先住民のアイデンティティと過去の記憶は、ソ連の社会制度と不即不離に混じり合って生成されてきており、それ故にこそ1989年と1992年という体制転換前後のきわめて早い時期にサハリンのニプフ人の人類学調査を行ったB・グラントも、この「文化の家」を自らの民族誌の題目に掲げたのだと思われる(Grant 1995)。翻って、ソ連民族政策と密接な関係を保持したソビエト民族学が練り上げてきた民族概念や伝統概念もまた、自己アイデンティティや時空認識・対外認識といった面で見られる住民のイーミックな諸概念と不可分に結びついている。そこでは高度に民族学化した社会が出現していたのだ。従って、調査者の目前で繰り広げられる民族誌的な事実、つまり人々の行為や言説は、ソビエト民族学と社会主義文化政策に強く影響されているわけであり、この背景を知らずに民族誌を書く、結局ソビエト民族学の民族誌をなぞって、それを元に分析、考察をするという循環論法に陥ってしまう危険もあるのである。それ故、ソビエト民族学の影響力を相対化してフィールドの現実に民族誌記述を施すという実践的な文脈においても、ソビエト民族学の具体的位相の解明は急務なのである。

なお本書の佐々木論文が示すように、ソビエト民族学の理論は、これまでに全く外部で紹介されてこなかったわけでない¹¹⁾。特に、冷戦時代にソ連圏の人類学を志した研究者は、民族理論と政策に関わる文献研究(本書の渡邊論文参照)だけでなく、ソビエト民族学の民族誌データを用いた、シャマニズムやトナカイ飼育など人類学上の諸課題の

再分析や、当時の「最新」理論動向の紹介や翻訳なども行ってきた。しかし、当時の彼らと、ポスト社会主義人類学を志すフィールドワーカーの間には、概念や理論それ自体の理解を目的とした前者に対し、ソ連体制という歴史的・社会的文脈の中でソビエト民族学の概念や理論の位相を解説することにより強い関心を寄せる後者という、小さくない隔りがある。さらにいえば、本書が立ち上げる「制度としてのソビエト民族学」という研究視座は、近年の西欧人類学の中で半ば常識化された知と力との結びつきという問題関心を、ソ連圏という文脈に即して考察するものともなるだろう。人類学的知も客観的知識だけが発展してきたわけではなく、むしろ近代西欧の軍事・政治・経済の力の時空的連鎖の上で解釈し、位置づけていく必要があると考えられるようになった。「制度としてのソビエト民族学」は、この西欧人類学の視座を、ソ連というフィールドに適用していこうとする試みとしても定位できる。

しかしこの適用は、ことソ連というフィールドにおいては、さらに深い観察を可能にするだろう。なぜならソビエト民族学は「帝国」的ですからあったからである。多くの社会主義圏において、教育・学術制度やこれをささえるイデオロギーが、ソ連社会主義制度をひな型としたように、ソビエト民族学という人類学的知の編成もまた、その内容および制度の面で隣接諸国に大きな影響を与えた。本書のいくつかの論文が示しているように東欧でも（神原論文・仲津論文）、またモンゴルや1950年代の中国¹²⁾でも、ブルジョワ＝西側人類学と決別した人類学として、ソビエト民族学は強い求心力を、一時期にせよ発揮した。この点でソビエト民族学は清水（2001：185）がいうところの「旧宗主国タイプの人類学」だということができる。この民族学は、本書の加藤論文や折茂論文が示すように、考古学や歴史学といった隣接分野との関係、さらに現地人類学者（native anthropologist）との関係すらも、西側や日本とは異なったかたちで編成し直した人類学であった¹³⁾。現地人類学者という問題群はさらに、本書の坂井論文にも示されているように、文化をめぐる政治という今日的な次元にとどまらず、20世紀初頭の民族知識人という歴史の深みへと探求を導いていく。ここにおいて、人類学というまぎれもなく1つの科学＝学問の分野の歴史と、そこにはぐくまれてきた思想には、「我々」の学説史で定式化されたもの以外にも別の可能性があった位相が浮かび上がってくる。

つまり「制度としてのソビエト民族学」の解明は、人類学の定義も含めてその知識がもつ、社会における位相を探求することに連なる、いいかえるとその理論と歴史の思想的・社会史的な文脈の省察まで射程に入れることが可能なのである。本書において旧ソ連圏地域に対する人類学的アプローチに、フィールドの社会文化現象の観察・分析だけでなく、そのフィールドを包括する国家社会に基盤を置くソビエト民族学という知の制度に対する洞察の双方を含めていこうとする目的は、まさにここにある。

「全体としての文化」という研究対象を人類学が掲げる以上、人間行動・発話・観念といった現象面だけでなく、当該社会内の専門家による高度な知識体系それ自体の解明

も、当然その視野に入らなければならぬ。それが広い意味での人類学的知識ならばなおさらである。しかし、本書が取り組もうとするのは、ネイティブ人類学としてソビエト民族学を位置づけることでもないし、ましてや構築主義的観点から外在的にそのイデオロギーと政治的な力との結合を暴露することでもない。一言でいうなら、「政治権力に貢献するイデオロギーとしてのソビエト民族学」という定式化された批判そのものを脱構築していくことである。一枚岩としてのソビエト民族学を想定するのは、ある意味たやすい。しかしそうではなく、むしろ、その民族理論や歴史理論の構築にみられる社会批判や思想のあり方をめぐる力のせめぎあいの個別の実像を浮かび上がらせることが必要だというのが筆者の認識である。知的営為と社会との緊張を歴史・社会的文脈に即して見極めようとする視座は、なぜソビエト民族学の概念と知識が、民族と文化に関わるソ連社会の土台みとなってきたのかを照射するからである。同時に、それは我々自身の人類学と社会との関係への内省をも誘うのである。

西側人類学のアプローチはあくまでポスト社会主義民族誌の解明に主眼があり、制度としてのソビエト民族学の解明は、人類学者よりもむしろ歴史研究者にゆだねられ、知と力の結合に対する外在的批判というレベルで止まっている。これに対し、本書が構想するポスト社会主義人類学は、ソビエト民族学の再評価を通じて、他者としての社会主義を脱構築する民族誌記述の可能性をさぐるという点に独自性がある。ソビエト民族学の批判精神と社会構想力を読み取りながら、その一方で政治的な力と知の結びつきを当該社会の歴史・社会的文脈に即して明らかにすることは、旧ソ連圏の民族誌記述に必要な視座を提示することなのである。

7 本書のねらいと構成

7.1 人類学史におけるソビエト民族学の位置

最後に、本書のねらいと構成について紹介しておきたい。ポスト社会主義人類学の課題として重要なのは、(1)「制度としてのソビエト民族学」、(2)「ポスト社会主義民族誌の可能性」である。この2つは、それぞれの研究領域を形成しながらも、相互に関連しあっていることを意識しながら、探求されるべき対象である。本書は、この2つを大きな柱とし、ポスト社会主義人類学において確立されつつある研究領域の可能性を提示するとともに、人類学内部の他の研究分野や隣接分野との連関性をさぐることを目的としている。

第1編「制度としてのソビエト民族学」は、ソビエト民族学が旧ソ連圏に存在した社会的文脈をふまえながら、理論展開や隣接諸科学との関係や、さらに旧ソ連圏における影響や西側人類学・歴史学との交流という諸相をさぐるものである。ここでは文献調査に基づきながら、学説史や思想的なアプローチが採られている。上述してきたよう

に、制度としてのソビエト民族学という課題は、これまでは、構築主義的立場から、ソビエト民族学の発展過程における政治性と力の問題を批判的に解釈するというアプローチが主流であった。これに対して、本書の著者たちは、そうした研究史をふまつつも、さらにそこから進んで理論や歴史的文脈の価値を再評価する、あるいは冷静・詳細にその史的展開の叙述という態度をとっているのが特徴である。

第1部「民族学理論の位相と歴史主義の可能性」では、ソビエト民族学理論における歴史主義とエトノス理論が紹介されるとともに、それらが提示された歴史的背景を批判的に分析しながら、ソビエト民族学が獲得した理論的地平を再評価する必要性が指摘されている¹⁴⁾。

佐々木論文「ソビエト民族学の理論と西側人類学との対話」は、西側人類学とソビエト民族学の知的交流の歴史を叙述しながら、独自の展開を遂げたソビエト民族学の理論的可能性をさぐろうとするものである。西側人類学とソビエト民族学は相互に「他者」であったが、対話を継続してきた関係にもあった。この点は、日本人類学と西側人類学ないし日本人類学とソビエト民族学との関係とは著しく異なっている。対話の牽引者の1人は、日本ではイスラーム人類学・社会理論家として知られるゲルナーであった。佐々木は、ゲルナーの議論を紹介しながら、ソビエト民族学における歴史主義に現代人類学の理論的可能性を見いだしている。この歴史主義概念は、なぜ彼らは「現在」を扱わないのかという、ソビエト民族学に接した多くが抱く問題と直結している。そうした歴史主義を理解するには、そこで構築されたエトノス理論を理解する必要がある。

渡邊論文「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防——ソビエト科学誌の為に」は、それに答えるものであり、同時になぜそのような理論を必要としたかについても批判的考察が及んでいる。ソビエト民族学のテキストは「理論武装」なしに解釈できないという前提に立つ渡邊は、単にその制度的文脈を追うのではなく、理論の展開という内部進化に焦点をあてる。それは、亡命ロシア人シロコゴロフ、ソビエト民族学を牽引したブロムレイ、その地位を引き継ぐとともにソビエト民族学理論を批判したティシコフ、という3人のエトノス論の間に存在する連関を読み取るというアプローチであった。興味深いのは、従来、ソビエト民族学の理論的指導者として批判されることの多かった、ブロムレイの理論的価値を再発見しようとする問題意識である。渡邊は、ソ連型民族別連邦制の正当化でありながら、同時にソ連社会批判も内包していたというブロムレイ論の性質を解釈してみせた。さらに、この解釈を通じて、これまでソビエト社会学の下位分野と考えられてきた「民族社会学」がソビエト民族学の歴史主義を補完する役割を担い、2つがそろふことによりソビエト「人類学」が存在していたことも示唆した。

第2部「隣接分野との関係、周辺諸国における影響」では、ソビエト考古学における民族起源論の学説史と、考古学・美術史によって想像された原始性と人類学との関わりが論じられた後、東欧においてソビエト民族学がかつてもった影響とその脱却の諸相が

扱われる。

加藤論文「旧ソビエト考古学における民族起源論の系譜」と、折茂論文「原始的なもの——人間性の起源と共産制社会の探究」からわかるのは、民族学と同様にソビエト考古学も、世界の考古学にあって独自の位置を占めていたことである。とりわけその独自性は「民族起源論」という人類学と考古学の融合分野を開発した点に認められる。民族起源論は、従来、マルクス＝レーニン主義イデオロギーと結び付けられてきたが、加藤によれば、むしろ革命以前のロシア考古学の系譜に重要な基礎があるのだという。加藤は、詳細にその理論的・方法論的特徴を説明し、革命以前からソビエト考古学に至る過程を論じている。民族起源論という課題がイデオロギーからの演繹ではなく、スラブの起源に対する関心を核として生まれたという指摘は、ソビエト考古学の理論的土台の性格を窺い知る上で、大変興味深い。

一方の折茂論文は、19世紀の人類学的知識といわゆる「未開芸術」との関係性を、ロシア美術史をふまえて考察した異色の論考である。注目したいのは、ロシアの芸術家にとってプリミティビズムの対象は、異民族だけでなく自民族でもあったという指摘である。ここから導ける論点は、自民族・異民族すべてに関わる本源性＝未開性を科学・思想的に問うことは、人類学や考古学において人類の本質を考察することであり、それを政治的に開発＝実践することは革命である、という点である。この二論考からは、ソビエト民族学や考古学の思想的基盤が、ロシアの歴史文化——帝国内他者としての異民族の存在と、ロシアに対する西欧から他者化のまなごしの間の葛藤——と絡み合いながら準備されてきた文脈を読み取ることができる。

学術制度が社会主義のイデオロギー的側面だけでなく、ロシアという地域の文脈に規定されるという視点は、東欧でも同様であった。神原論文「スロヴァキアにおける文化人類学と社会主義——政治的イデオロギーの作用に関連して」が示す事例は、まさにソ連圏においてソビエト民族学がもっていた力の盛衰を示すものである。その過程とは、ソビエト民族学が導入され、放棄され、文化人類学へと変わったという経過である。現在のスロヴァキア人類学者は、社会主義時代を理論的空白とみなしているが、当時、模索された「現代をみる視座」が、ポスト社会主義期におけるスロヴァキア人類学の理論的転換の礎になったと認識しているという。ソビエト民族学は我々の人類学と比べるとフィールドワークに重きをおかなかったが、そのことがスロヴァキア「文化人類学」を生み出したと認識しているとすれば、興味深い。とはいえ、スロヴァキア人類学は、単にソ連から西側へ理論が変わっただけではないことに注意する必要がある。スロヴァキアにおける人類学的的土壌は、フォークロア研究との関係なしには存立せず、概念・用語をめぐって錯綜した状況が示されている。この状況は、ドイツ・中東欧・スラブ＝ロシア圏に見られる、フォークロア研究と人類学研究との密接な関係性の文脈の中に位置づけることができる。それは日本の人類学と類似した位相である反面、英米人類学と

は大きく異なっている。神原研究から導けるのは、人類学史を構想する際、マリノフスキーを基点に排他的にその研究領域を設定することでなく、その隣接科学とりわけフォークロア・民俗学研究との人的・理論的連関に着目することの方法論的重要性だといえよう。

第2部の最後は、仲津論文「学術理論の思想史的分析から地域をよみとく——ポーランド史家トボルスキの歴史学方法論」である。この論考が興味深いのは、ソ連崩壊とその前後につづく構築主義のパラダイム転換という西側・日本の人文社会科学にあって定着した本質主義的ソビエト民族学・歴史学を安易に断罪する風潮への批判が込められているからである。旧社会主義圏の研究を後進的と見なすのは、歴史的・政治的文脈を過度に強調し、西欧科学史と異なる地域独自の発達を遂げた科学思考に対する理解が十分でなかったために生じた偏見だという主張は、ポスト社会主義人類学に携わる者が「現地の人類学」とどうように関わるのかという点で重要な指摘となっている。

7.2 エスニシティと伝統主義

こうしたソビエト民族学史の文脈の照射とその理論の再評価という第I編に対して、第II編は、「ポスト社会主義民族誌の可能性」である。つまり、「ソ連現代史に由来する理念・制度を含みながら現存する社会空間」に対する人類学的理解と考察である。本編では主に、エスニシティ・メディア・宗教実践・生産と市場化という広い意味で4つの社会文化現象が取り上げられている。これらは、日本のポスト社会主義人類学がこれまでに対象化した研究領域とはほぼ照応する各主題である。各論文は、ポスト社会主義におけるアクチュアルな「現在」を、自らのフィールドワークによって記述し、旧ソ連圏特有の社会空間を提示しながら、それと同時に人類学的比較研究の地平へと考察を広げている。

最初に提示するのは、第3部「エスニシティとナショナリズムにおける民族の想像」である。この部では、旧ソ連圏における最大の民族集団であり、他の諸民族のエスニシティ生成に最も影響を与えるロシア人に対する分析と、ソ連崩壊後の新興諸国におけるナショナリズムを理解する上で決定的に重要な「民族英雄」の社会的位相の考察を取り上げている。

従来にないロシア人研究を切り開いたのは、「ロシア連邦におけるロシア人サブグループをめぐる昨今の状況——民族の境界と『権利』の諸相」と題する伊賀上論文である。「ロシア人サブグループ」というロシア人にとって文化的他者性を内包する似た非なる／非なる似た存在は、いかなる呼称とするかはともかく、革命以前から知られていた。それらがソビエト民族学と民族政策の中で「サブグループ」という概念によって範疇化され、形成されてきたこと自体、住民による社会現象という意味でのエスニシティ形成と、これを国家が囲い込み制度化しようとする過程が現在にまで継続していることを示している。ここからは民族的範疇であるロシア人が、旧ソ連圏においてなぜ同時に、国民・言

語・文明的範疇たりうるのかその答えが示されている。

中央アジアの2事例は、クルグズスタン（キルギスタン）とウズベキスタン内部のカラカルパク共和国のナショナリズムと民族英雄の関係を考察したものである。中央アジアそしてシベリアのテュルク系諸民族は、英雄叙事詩を文化伝統として有しており、そこに登場する英雄はきわめて象徴的意義にあふれている。それらはエスニシティを制度的な意味での政治的力に変換する際に、きわめて求心力のある文化資源と位置づけられてきたことは、すでに様々なかたちで指摘されてきている。これに対し、第3部の吉田論文「英雄叙事詩マナスとネイション形成再考——北部クルグズ（キルギス）農村から見たネイション実践」は、そうした政治化を推進するエリートと住民の文化に対する認識が一体化しているわけでも、あるいは完全に分離しているわけでもない緊張関係にあることを示している。むしろ両者の間には社会文化的な空白があり、住民は自らの日常実践の文脈から政策へと飛躍しなければならない様子が示されている。また坂井論文「カラカルパクの知識人ダウカラエフについて」は、ソ連崩壊後の政治過程で文化・教育資源化した叙事詩を発掘した、民族知識人の人生と研究についての基礎的研究である。この研究からは、民族政策や教育制度における「民族」の位置づけと、ソビエト民族学とスターリニズムとの関連という歴史的背景が、民族知識人の弾圧をめぐる歴史の解説に不可欠であることが示される。19世紀末から20世紀初頭に活躍したいわゆる民族知識人の再評価という近年の社会現象は、ソ連崩壊前後のエスニシティと政治的統合の結びつきの中で起きた事実に着目することが重要であるとする坂井論文は、旧ソ連圏とくに中央アジア・シベリア・モンゴルの分析においては方法論的視座とすらなっている。

第4部は「ロシア文化の伝統とメディア」として、ロシア文化研究の新機軸を提示した。ポスト社会主義期におけるマスメディアと連動した呪術の復興という現象に対する分析、そしてロシアの民族楽器として認識されるバラライカという伝統の起源の解明、が主題である。

日本の人文社会科学において、ロシア人・ロシア文化研究は、戦前および冷戦時代を通して、広義のロシア文学者が担ってきた。その視座は、先に述べたソ連＝ロシアの枠を踏襲するものであった。彼らの蓄積は、日本のロシア学を牽引してきたが、一方でロシアという存在を所与の前提とし、その外部を問うことのない膨大な言説の体系であった。ロシアそのものを相対化するという視点がきわめて弱かったのである。日本や欧米との比較研究はあったが、いずれも日本や欧米という本質化された主体を比較の軸に据え、ロシアも本質主義的に捉えていた。もちろんロシア・フォークロア研究という名の下に、ロシアの「異教」的要素に着目した他、儀礼と社会論という枠組みで人類学研究分野との接点を維持してきたことも事実である。しかし、それらは「伝統」への関心が強く、「現在」への関心が希薄であった。1980年代後半から日本で顕在化した構築主義という理論も、文化研究に大きな影響を与えたとは思われない。また文化研究は、政治

学・歴史学主導で模索された旧ソ連地域研究の再編とも無縁だったように思われる。それ故、人類学者は、現地調査を通じて、何を文化として把握すべきか、その根源的問いから出発することを余儀なくされた。人類学者は、長年のロシア文化学の伝統を否定したわけではない。しかし、かつて蓄積された知識と論点は、現存する社会文化現象の人類学的分析には役立たず、基礎からの土台の構築を要した。第4部の2論考は、この中で一から編まれた業績といえる。

ロシアの呪術とは社会主義の宗教政策で葬りさらされた歴史的過去であり、それ故に研究者によって収集・記述された=物質化されたテキストであり、故に学術的分析が可能である——このような前提は、日本のロシア・フォークロア研究だけでなく、ソビエト民族学の基盤でもあった。しかし1990年代ロシアの社会現象は、そういう枠組みでは理解できなくなっていた。むしろソ連崩壊後の政治経済的不安によって、呪術こそが人々にとってリアルな現実を把握する参照体系と化していた。藤原論文「現代ロシアにおける呪術ブームの生成——呪術研究と呪術実践の交差点から」は、この状況を巧みに捉え、現在のロシアにみられる呪術が、社会主義体制のくびきが外れたマスメディア・大衆出版物産業とリンクしながら人々によって実践されている事実を示している。柚木論文「ソ連におけるロシアの民族器楽——楽器バラライカを事例として」は、民族音楽学の立場からバラライカの起源を分析した。ポスト社会主義の現在を直接扱っているわけではないものの、ロシアの民族性を本質化するのに最も役立ってきた楽器がもつ、歴史と現在の文脈をさぐりあてたものである。この2本の論考と第3章の伊賀上論文を読めば、ポスト社会主義人類学的視座のロシア研究が、従来の文学的ロシア研究といかに異なっているのか、そしてそれらが「現存」する現象に対して、いかに適切な分析力を備えているか、が読み取れよう。

7.3 資本主義化過程の中での生き方と心の問題

第5部は、「宗教復興と記憶の位相」としてカザフスタン、ウズベキスタン、モンゴルという中央アジア・内陸アジア地域の宗教的实践を取り上げている。宗教復興は、ソ連崩壊に際して、ナショナリズムの問題と並んで最も焦点があてられた研究領域であった。社会主義政府の「宗教弾圧」からの転換と新興諸国のナショナリズムの勃興という社会的文脈を分析する最大の鍵の1つだったからである。本書の滝澤論文も示唆するように、旧ソ連圏では宗教が社会主義イデオロギーの下で、継続的に「弾圧」されてきたわけでもなく、単純に否定されていたわけでもなかった。宗教の概念およびその実践行為は、社会の公的領域から排除されてきたのである。この位相に気づくことによって、ソ連崩壊後、宗教現象は公的領域および私的領域においてどのように出現しているのか、より具体的には、資本主義化の中で社会諸制度や倫理はどのように変化し、公と私の関係性や相互の範疇はどのように再編されたのか、という問いをはじめて発することがで

きる。第5部の諸論考は、こうした問題関心を根底に共有しながら、各地域の民族誌記述をふまえて、住民が実践する宗教行為と集団の記憶・アイデンティティを考察している。ここで論じられる諸テーマは、典型的なポスト社会主義の議論でありながら、同時に他地域の比較研究との関連性も強く帯びているといえよう。

旧ソ連圏の宗教という課題にあって最も重要なものの1つが、イスラームとの関わりであることはいうまでもない。菊田論文「2つの原理と7つの核——ソビエト時代を経たウズベキスタン・イスラームの構図と実態」は、旧ソ連内のイスラーム現象を理解する分析手法として従来、採られてきた公式イスラームと並行イスラームの二項対立を批判し、ウズベキスタンの地域的コンテクストに立脚した方法論を提唱している。この研究は地域独特のイスラームの様相を伝えつつ、ポスト社会主義圏の特徴を把握し、他のムスリム社会との比較研究を拓いていくための第1歩となろう。藤本論文「ポスト・ソビエト時代における大規模な供養アスの展開——カザフスタン北部農村の事例から」は、地域の政治秩序を維持するためにおこなわれていたカザフのアスという伝統的祝祭が、ソ連時代を経て、現在、現地の人々によって、歴史や伝統の見直しやイスラーム実践などを含みつつ、住民のアイデンティティにも直結する郷土史として地域史に再編されている過程を、豊富な民族誌事例を使って追跡し、その意味の解釈をおこなったものである。

第5部ではイスラームだけでなく、キリスト教もまた分析の対象となっている。ロシア社会はロシア正教というキリスト教を伝統としてもち、ロシア革命以前は、正教会がロシア人以外の諸民族に対する文明の伝道役を果たしていた。興味深いことに、現在、多くの少数民族が、キリスト教に由来する名前を子供につけるようになっている。キリスト教をめぐる問題には、こうしたスラブ＝ロシアの伝統の復興の他にも、1990年代以降、旧ソ連圏に人道援助という意味も含めて多数、流入してきた欧米系や韓国系のプロテスタント系キリスト教団体を含めることができる。

滝澤論文「社会主義と宗教の記憶——モンゴルにおける家庭内祭祀の持続と変容を中心に」は、モンゴル国におけるポスト社会主義の宗教復興と呼ばれる現象を、家庭内祭祀と宗教上の公私の論点から分析したものである。滝澤が着目するのは、社会主義体制下の宗教政策は、公的領域から宗教を排除すると同時に、従来のモンゴル社会にそもそも存在しなかった公私という区別そのものを作りだしたという点である。そのことが20世紀末までにモンゴルにおいて、公つまり社会領域と切り離された家庭祭祀という私的領域を明確に確立させたと指摘する。そして、生みだされた宗教＝私的領域という区分が、ポスト社会主義期におけるキリスト教受容の社会的条件となったことを示唆する。

最後の第6部は「市場化における生産と仕事をめぐる位相」である。第6部は、市場化に伴う地域社会の社会経済的変化について、住民の適応という観点から分析し、新たな社会的な倫理や制度が生成されている様子を人類学的に考察したものである。読者は、以下の分析から、ジェンダー研究や経済人類学といった既存の研究領域との接点を

読み解くことができるだろう。その意味で第5部と同じ、あるいはそれ以上に、第6部は、他地域の類似現象との比較研究にむかって開かれた内容となっている。

今堀論文「持参財を飾る刺繍、販売する刺繍——ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区のカシュタ制作の事例」は、ウズベキスタンの民族性を象徴化し、そして女性の仕事として位置づけられる刺繍生産を事例に、その歴史的背景をふまえながら社会的価値の変化を分析している。従来の研究では、ウズベキスタンは、地域社会の市場化過程にあって、社会主義的な意味での「集団主義」を色濃く残存させていることが報告されていた。これに対して、本報告からは、女性性や儀礼的価値や商品性といった刺繍生産に内包される社会的文脈が、逆に個人主義的实践を促し、さらに女性起業家まで生み出すものであることが読み取れる。ポスト社会主義期の住民の経済活動における文化の資源化と、女性のアイデンティティ生成過程についてのこの論考は他地域との比較に開かれたものとなっている。

つづく2つの論文は北方ユーラシアの伝統的な牧畜社会の変容を扱っている。尾崎論文「モンゴル牧民社会における郊外化現象——ポスト『ポスト社会主義』的牧民の出現に関する試論」は、社会主義崩壊直後の状況とはすでに質的に異なる段階に入ったモンゴル牧民社会の特質を「ポスト『ポスト社会主義』」という概念で捉えようとしている。尾崎が捉えたところでは、1990年代の変化は、集団生産体制の崩壊による自給的生産経済の構築であったのに対し、21世紀の現在は、むしろ流通システムの再構築に基づいた都市空間とのリンクの強化であり、牧畜民は郊外において放牧するようになった。この過程は、市場に対する伝統的牧畜生産の新たな適応の側面を示していると考えられる。最後の高倉論文「ポスト社会主義下における牧畜生産の市場経済適応過程とその文化的位相——東シベリア・サハ人の牛馬飼養文化の変容」が描きだした変化も、伝統的適応過程という点では類似している。資本主義化過程で新たに生まれた「個人馬牧夫」という職業の分析から、食文化や牧畜生産がもつ、伝統の市場適応能力を論じているからである。尾崎と高倉は、現象における時間の位相をどう分析するかの手法が異なるため、結論も異なっているが、2人がともに捉えているのは、社会主義崩壊後の牧畜社会が内包する伝統の弾力性である。とはいえ、私有制の導入と市場原理という新しく、そしてそれ故に不安定な制度への移行期において、伝統的な社会的紐帯と生存維持活動が社会救済的機能を備えた住民の適応戦略となるとする理論的考察そのものは、人類学においては案外、常套的である。高倉の議論の独自性は、市場経済に適合的な生産活動だけでなく、これをささえる社会経済的諸関係も生成されている位相を、二重経済論の枠組みを用いながら、今一步、踏み込んだかたちで論証している点にある。さらにシベリア狩猟牧畜研究を、内陸アジアというまでもなく、中東やアフリカ研究と接合させようとも試みている。その取組みの成否の判断は読者にゆだねられるが、ポスト社会主義人類学が人類学全般に貢献するためには、この比較の視座こそ共有される必要があるだろう。

8 おわりに ― ポスト社会主義人類学の過渡性と可能性

本書は中堅から若手の研究者によって執筆されているが、それはすでに述べてきたようにポスト社会主義人類学というプログラムが生成された歴史的な文脈に由来する。若さ故のやや荒削りな論もみられるが、他方で歴史・理論に関する思想史・社会史的アプローチ、フィールドワークに基づく記述・分析いずれにおいても、新しい研究領域を切り拓こうとする力強い意志に満ちているだろう。编者としても、本書は、従来の人類学研究に存在しなかった研究の視座を示し、また新たな民族誌的事実を蓄積するとともに、そのための方法論的考察を編みだしたという意味で、人類学というディシプリンの様々な可能性を提示するものになったと思う。旧ソ連圏の民族誌研究は、従来の地域研究における学際協力、そして人類学内部の比較対象という2つの意味で空白であった。本書はこれを埋める最初の一里塚である。

すでに述べたように筆者は、ポスト社会主義人類学は、パラダイム構築を含むような独自の研究領域を構成するものではなく、むしろ過渡的性格をもつ研究プログラムであると考えている。確かに「制度としてのソビエト民族学」というテーマは、それ自体独自の課題であるが、これもまた最終的には人類学史や、人類学的知識の社会的位相に関する比較研究という枠組みの中で検討されるべきである。このような、我々からみると特異といえる人類学がかつて存在したという視座の下で、人類学史を再考することが必要だろう。

日本人類学は、西側人類学と問題関心の一部を共有しているが、明らかにそれと同一の知的共同体を形成していない。「制度としてのソビエト民族学」がもつ視点は、この日本の位相についても、問いを投げかけてくる。とりわけ事実と理論について、解釈学的な枠組みが方法論の重要な支柱を構成している現在、研究に関わる言語と制度のもつ意味について無自覚なままではいられない。本書の考察は、日本民俗学と文化人類学、さらに生態人類学／人類生態学が時折入り交じりながらも奇妙に共生している日本の人類学の位相にも再考を促すことになるだろう。

またポスト社会主義人類学は、おそらくその出発点こそ、集団農場・国営農場事務所・文化の家・民族籍・民族文化等といった旧ソ連圏特有の民俗概念と社会制度を共有したという意味で共通の枠組みをもつが、その民族誌的解剖を進めることは決して閉じた体系を作ることにはならないはずである。すでに本書の各論文で取り組まれているように、同人類学は、既存の人類学の研究領域と接合することにより、それらを再編・発展させていく可能性をもつ。この中で「伝統・社会主義・現在」という3つの時間的位相を読み解くというポスト社会主義人類学のアプローチは、特に重要である。なぜなら、このアプローチは「伝統」と「現在」という二元論ではなく、この間に存在しうるそれぞれの地域固有の歴史的位相を複数設定し、それらを視野に入れながら同時代の社会文化現

象を分析するという方法を導くからである。言い換えれば、人類学において通文化的に想定可能なそれぞれの「伝統」と「現在」を両端におきながら、その間に地域固有の「近過去」を想定し、3つの要素の相関性を社会科学的に分析するというのが、ポスト社会主義人類学が提起する方法論なのである。このアプローチは、旧ソ連圏以外の中国、ベトナムやラオス、エチオピア、中南米等といった（旧）社会主義体制に対してはいうまでもなく、社会主義とは無関係な地域におけるグローバリズムを含む様々な社会変動下を含む民族誌的分析に対しても、有効であるに違いない。

注

- 1) 人類学の分野では、シベリアという地域概念は先住民と結びついており、環北極文化圏や北アジア・東アジア文化圏との関係性から定位される地域概念である（高倉 2008）。このためロシアと独立した地域区分と見なされている。一方、本稿でいうロシアという地域概念は二重の意味を持つ。人類学の伝統とくに文化史的視座では、ロシアはヨーロッパ・ロシアつまりウラル山脈以西を故地とするスラブ＝ロシアという地域概念を意味する。しかし本稿で後述するように、政治史的視座からは、シベリア及びコーカサスの一部を含むのがソ連＝ロシアである。本稿では、こうしたシベリア・コーカサス・ロシアといった一元的に定義できない地域概念を包括するものとして旧ソ連圏を用いる。
- 2) 2007年度も共同研究そのものは継続したが、成果報告出版のための補足的延長であった。
- 3) その成果報告書は、佐々木史郎編（2003）にまとめられているが、そこでは参加者の個人研究成果論文以外に、共同で「ポスト社会主義農村を対象とした民族誌学的調査項目リスト」が作成されている。
- 4) 共同研究における研究会の記録は本論文末尾の付録にある。
- 5) いわゆる西欧やアメリカ合衆国といった先進資本主義諸国をさす。本稿においては原則的に「西側」に日本を含めない。だが、20世紀冷戦構造下の国際政治構造を踏まえた文脈では日本が含まれることを否定しない。
- 6) ハンフリーは同様の視点から、旧東独のルドルフ・バロー（R. Bahro）の言った「現実中存在する社会主義」という視点こそがポスト社会主義人類学の基本的な共有視座（foundational unity）であると指摘している（Hann et al. 2002: 12）。
- 7) このことはかつて拙稿（高倉 2000）において「ソビエト規格文化」の日常生活と述べたことがある。
- 8) こうした歴史は、現存の民族誌を記述する上での背景的知識であると同時に、それ以上の意味をもっている。モンゴル研究においては、小長谷有紀（2004）によって「社会主義を生きた人々の証言」によるオーラルヒストリーが編纂され、刊行されている。
- 9) 例えば、栗本・井野瀬編（1999）や杉島編（2001）を見よ。また中央アジア史の宇山（2008: 32）は、同様の観点から「人類学者が構築主義を通して文化の歴史性に関する感覚を磨いたことは、人類学と近現代史研究を接近させ、地域研究の発展に大きな意味を持った」と述べている。
- 10) 農村部において行政区ごとに設けられた総合文化センター。通常、図書室と劇場が併設され、民芸制作や音楽美術教室など、児童むけおよび社会人むけの教育プログラムが開催される。
- 11) 細かな紹介は省くが、例えば1960年代には『北アジア民族学』（北アジア民族学研究会編、金

沢大学文学部東洋史研究室発行)なる雑誌が全6巻刊行され、数多くのソ連民族学の理論が集中的に翻訳された。

- 12) 研究会においてはモンゴル、中国、ブルガリアにおけるソビエト民族学の影響も議論された。付録参照。
- 13) ソビエト民族学における「現地人類学」の位置づけは、西欧・米国人類学のそれらとはかなり異なっている。この点についてはハンフリー (Humphrey 1984) および拙稿 (Takakura 2006) を見よ。
- 14) 類似した着想に基づくソビエト民族学の再評価は、拙稿 (高倉 2008) も行っている。

文 献

Brubaker, R.

1996 *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.

Grant, B.

1995 *In the Soviet House of Culture: a Century of Perestroikas*. Princeton: Princeton University Press.

Hann, C. (ed.)

1993 *Socialism: Ideals, Ideologies, and Local Practice*. (*Association of Social Anthropologists monographs* 31) London and New York: Routledge.

1998 *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.

2003 *The Postsocialist Agrarian Question: Property Relations and the Rural Condition*. (*Halle Studies in the Anthropology of Eurasia* 1) Münster: Lit.

Hann, C. et al.

2002 Introduction: Postsocialism as a Topic of Anthropological Investigation. In C. Hann (ed.) *Postsocialism: Ideals, Ideologies and Practices in Eurasia*, pp. 1-28. London and New York: Routledge.

Hirsch, F.

2005 *Empire of Nations: Ethnographic Knowledge and the Making of the Soviet Union*. Ithaca and London: Cornell University Press.

Humphrey, C.

1984 Some Recent Developments in Ethnography in the USSR (Review Article). *Man* new series 19 (2): 310-320.

家田 修

2008 「序文——スラブ・ユーラシア学とは何か」家田修編『開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』(講座スラブ・ユーラシア学1) pp. 11-26, 東京: 講談社。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人々の証言』東京: 中央公論新社。

栗本英世・井野瀬久美恵編

1999 『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』京都: 人文書院。

Leonard, P. and D. Kaneff

2002 *Post-Socialist Peasant?: Rural and Urban Constructions of Identity in Eastern Europe, East Asia and the Former Soviet Union*. New York: Palgrave.

Mandel, R. and C. Humphrey (eds)

2002 *Markets & Moralities: Ethnographies of Postsocialism*. Oxford and New York: Berg.

佐原徹哉

2004 「ポスト『ポスト社会主義』への視座——南東欧地域研究の立場から」21世紀COE史資料ハブ地域文化研究拠点・史資料総括班+多言語社会研究会編『脱帝国と多言語化社会のゆくえ』pp. 18-22, 東京：東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」本部。

佐々木史郎編

2003 『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究——民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察』課題番号13610372, 大阪：国立民族学博物館。

清水昭俊

2001 「日本の人類学——国際的位置と可能性」杉島敬志編『人類学的実践の再構築』pp. 172-203, 京都：世界思想社。

塩川伸明

1999 『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』東京：岩波書店。

杉島敬志編

2001 『人類学的実践の再構築——ポストコロニアル転回以後』京都：世界思想社。

高倉浩樹 (Takakura, H.)

2000 『社会主義の民族誌——シベリアトナカイ飼育の風景』東京：東京都立大学出版会。

2006 *Indigenous Intellectuals and Suppressed Russian Anthropology: Sakha Ethnography from the End of the Nineteenth century to the 1930s. Current Anthropology* 47 (6): 1009-1016.

2008 「生業文化類型と地域表象——シベリア地域研究における人類学の方法と視座」宇山智彦編『地域認識——多民族空間の構造と表象』（講座スラブ・ユーラシア学2）pp. 175-201, 東京：講談社。

宇山智彦

2008 「序章 地域認識の方法——オリエンタリズム論を超えて」宇山智彦編『地域認識——多民族空間の構造と表象』（講座スラブ・ユーラシア学2）pp. 11-36, 東京：講談社。

渡邊日日

2002 「移行期社会の解釈から諸概念の再構成へ——ユーラシア社会人類学研究の観察」『ロシア史研究』70: 41-61。

付録 共同研究の記録

特別講師として招聘した発表者には*がつけてある。なお所属は発表当時。

第1回 2004年11月6日(土)～7日(日) (民博大演習室)

高倉浩樹 (東北大学東北アジア研究センター) 「趣旨説明」

佐々木史郎 (国立民族学博物館) 「ソ連民族学のシベリア研究史と先住民族」

渡邊日日 (東京大学大学院総合文化研究科) 「記述の体制——社会主義・連邦制・民族」

全員 「自己紹介と研究計画打ち合わせ」

第2回 2005年1月22日(土) (民博第3セミナー室)

国際ワークショップ「ソビエト民族学史の探求——隣接分野とエスニック要素の視座から」

V・シュニレルマン* (ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所) 「ソ連における民族政治としてのエスノゲネシス論」(英語)

高倉浩樹 「サハ民族知識人とロシア人類学史——1920～30s」(英語)

G・コマロワ* (ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所) 「ソビエト民族学における学際分野としての民族社会学——1960～1980s」(露語/日本語通訳)

第3回 2005年1月23日(日) (民博大演習室)

全員 「個別研究テーマについての全体討論」

第4回 2005年4月22日(金)～23日(土) (東北大学・東北アジア研究センター)

国立民族学博物館・東北大学東北アジア研究センター・セミナー合同研究会「ポスト社会主義世界の民族・文化・宗教」

セッションⅠ：ポスト社会主義地域研究の最前線

中村知子* (東北大学大学院環境科学研究科) 「西部大開発実践下の人々——中国甘肅省を例に」

杉本敦* (東北大学大学院文学研究科) 「『ルーマニア農村』に関する人類学的研究——その家族のあり方を中心に」

滝澤克彦* (東北大学大学院文学研究科) 「ポスト社会主義モンゴルにおける宗教状況」

染矢文恵* (東北大学大学院国際文化研究科) 「コサックと『山岳民』の関係にみる北カフカスの革命——1917～1921」

セッションⅡ：ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用

藤原潤子 (東北大学東北アジア研究センター) 「ポスト社会主義ロシアにおける呪術

の復興」

渋谷謙次郎（神戸大学大学院法学研究科）「帝国・民族自決・多文化主義——ロシアの多民族編成原理と民族政策の行方」

佐々木史郎「ソ連民族学における人類社会発展史研究」

第5回 2005年7月30日(土)～31日(日) (民博第6セミナー室)

渡邊日日「ソビエト社会学史再考」

特別セッション：ポスト・ソビエト期ウズベキスタンの工芸に見る「伝統」の形態

菊田 悠（北海道大学スラブ研究センター）「開発途上のリソース——リシタン陶業の『伝統』事例」

今堀恵美（東京都立大学大学院博士課程）「女性の手仕事と工芸——ショーフィルコーン地区における刺繍制作から見る『伝統』」

中谷文美*（岡山大学文学部）「コメント」

第6回 2006年1月14日(土)～15日(日) (民博第6セミナー室)

吉田 陸（千葉大学文学部）「ソ連期初期の北方民族研究とソ連民族学」

加藤博文（北海道大学文学研究科）「ソビエト考古学とシベリア民族誌」

仲津由希子*（東京大学大学院博士課程）「ポーランド歴史学における『歴史学』概念——J. Topolskiを手がかりに」

伊賀上菜穂（大阪大学）「ロシア人サブグループに関する研究動向について」

第7回 2006年2月20日(月) (民博大演習室)

全員「今年度までの研究成果についての確認と今後の方向性についての討論」

柚木かおり*（関西学院大学）「民族／俗音楽と文化政策——『モスクワ80』と農村のパラライカ」

第8回 2006年5月13日(土)～14日(日) (民博第6セミナー室)

坂井弘紀（和光大学）「カラカルパクの知識人ダウカラエフについて」

松前もゆる（東京大学）「ブルガリア民族性とブルガリア民族学」

折茂克哉（東京大学）「展覧会で表象される民族／民俗」

第9回 2006年7月22日(土) (東京大学駒場キャンパス)

上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）「中国における『蘇聯民族学』の受容と変遷」

香坂直樹（東京大学）「チェコスロヴァキア主義と民族定義」

山崎信一（東京大学）「旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史叙述」

第10回 2006年11月18日（土）（民博第3セミナー室）

佐原徹也（明治大学）「バルカン内戦における『普通の人々』と自警団による残虐行為の間」

神原ゆうこ*（東京大学大学院博士課程）「スロヴァキアにおける文化人類学の転回——社会主義期とポスト社会主義期の研究動向の相違」

尾崎孝宏（鹿児島大学）「モンゴルにおけるソビエト民族学の適用状況——社会主義期とポスト社会主義期を通じて」

第11回 2007年2月17日（土）～18日（日）（民博大演習室）

藤本透子*（京都大学大学院博士課程）「カザフスタン北部農村における『祖先供養』の展開」

吉田世津子（四国学院大学）「宙に浮く民族英雄——北部クルグズ（キルギス）農村から見たナショナリズム論とその検討」

宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター）「ロシア帝政末期・ソ連時代初期の民族学関連研究と知識人——カザフスタンとタジキスタン」

全員「共同研究のまとめと成果についての打ち合わせ」